

## 西北九州支石墓の一考察

### はじめに

弥生時代の日本列島に展開した墓制の多くは、地表に標識としての小石やその他を配するものが少数みられるにせよ、本来的には地表下にある埋葬施設のみで完結したものとなっている。これに比べ支石墓は、巨大な撐石とそれを支える支石を上部構造として地上に置き、足下に地表を掘って埋葬主体部を設けるという極めて特異な構築物であることが指摘できる。

このように上部構造と下部構造が地上と地下に分離されているために、撐石や支石が開墾その他により破壊され、あるいは二次的な移動を受けやすい側面をもっている。仮に撐石や支石が撤去された場合に、埋葬主体が甕棺や土壙墓であると、支石墓の下部構造としての甕棺や土壙墓かどうかの識別が極めて困難となる。従って日本の支石墓を検討するに際しては、隣接地域の典型的な支石墓と比較検討しながら研究が推進されていったことはやむをえぬところである。

古くイギリス人ゴーランドは、日本や朝鮮の古墳を西欧の巨石記念物と見立てて支石墓の存在を主張したが<sup>(1)</sup>、鳥居龍藏氏は朝鮮での支石墓を具に検討した後に、古墳＝支石墓説を否定し、古墳以外の支石墓の究明に力を尽くした<sup>(2)</sup>。鳥居氏は大分県や宮崎県に支石墓が存在するのではないかとその可能性を説いたが、実証されぬままに終わってしまった。日本に於いて支石墓に対する関心が高まりだしたのは、昭和5年京都大学による福岡県須玖岡本遺跡の発掘調査を契機としている。すなわち同遺跡D地点で「露出せる大石の下約3尺を発掘して、甕棺と推定せらるるものを発見し、其の内部から鏡鑑、狭鋒銅鉾、細形銅剣、瑠璃製壁などを出し、なほ甕外からも銅剣類を出したものと推定せられ」たことから、南朝鮮の支石墓との関連が注目されるに至ったのである<sup>(3)</sup>。

支石墓の概念からすると大石の存在は支石墓の十分条件ではなく、上部構造と下部構造がはっきりと把握されないと支石墓と判別することはできない。梅原末治氏によるその復元図も報ぜられているが、昭和5年の調査は明示32年に破壊されたものの追認調査であり、復元の妥当性は低い。今日数多くの支石墓が発掘されているが、支石墓の副葬品に青銅器物を中心とした「宝器」を副葬する事例はなく、日本の支石墓がその系譜を引く朝鮮でも、見ることは少ない。この意味で日本に於ける支石墓研究の出発点となったのは、鏡山猛氏が福岡県小田遺跡、佐賀県徳須恵遺跡の支石墓を挙げて、弥生時代墓制の一つとして指摘されて以降であろう<sup>(4)</sup>。

戦後は福岡県志登支石墓をはじめとして、福岡、佐賀、長崎各県下での支石墓発見が相次ぎ、昭和27年には佐賀県葉山尻支石墓、28年には志登支石墓と本格的な発掘調査が行われるに及んで、ようやく具体的に支石墓を研究できる状況となった。こうした支石墓の発見と発掘を通して得られた資料を基に、鏡山猛氏は支石墓の総括的研究をおこなったのである<sup>(5)</sup>。鏡山氏は日本の支石墓が南朝鮮の碁盤型支石墓の系譜を引くこと、弥生時代前期・中期にみられること、分布が北部九州に限られ、その中心は銅剣・銅矛などの青銅製品を多く出土する地域に見られることなどを指摘した。こうした鏡山氏の研究と併せて佐賀県においては松尾禎作氏を中心として支石墓の集成と考察が行われた<sup>(6)</sup>。これは昭和31年以前に知られた支石墓関係の資料を

すべて網羅し、かつ各遺跡一つ一つについて個別解説を加えたものである。

この中で松尾氏は鏡山氏により試みられた内部主体の分類を推し進め、土壙、石室、石棺、石圀、甕棺と分けられること、さらに弥生時代後期にまで築造が続いたことなどを新たに提示した。日本の支石墓は碁盤型支石墓の系譜を引く点に於いて、形式的には単一であり、従って内部主体による支石墓の分類は当を得ている研究であるといえよう。しかしそうして分類された支石墓が、分布上、もしくは時代的にどのような意味関係を持つかと言う点に関しての言及はなかった。また支石墓とは考え難い遺跡の事例をもって弥生時代後期にまで支石墓の構築が及んだとする点に関しては、今日では受け容れ難い。

昭和30年代の初め頃に、日本の支石墓研究の一応の総括はこのようであったが、その後長崎県狸山支石墓、原山支石墓などの内部主体に箱式石棺墓を備えるグループの発掘調査が行われ、数多くが群在する点に於いて特異な在り方をしめす支石墓の存在が注目されるようになってきた。こうした箱式石棺墓を内部主体とする支石墓は、長崎県下で次々に知られるようになり、昭和44年森貞次郎氏により、「弥生文化形成期の支石墓」として位置づけられ他のである<sup>(7)</sup>。

即ち『韓国支石墓研究』で示された南方式第Ⅲ類支石墓の変容したものが、日本の支石墓であり、その変容の第1段階として土壙墓をもつ支石墓が出現し、第2段階として土壙墓をもつ支石墓の背後地域に箱式石棺墓を内部主体とする支石墓が成立したのであり、どれらは弥生文化形成期ともいふべき縄文時代晩期末に構築されたものと想定されたのである。こうした支石墓に関する諸研究をまとめて、昭和50年に下條信行氏は次のような総括を行っている。

1. 縄文時代末から弥生時代初頭にかけて唐津平野では土壙墓、長崎県下では石棺墓を内部主体とする支石墓が形成された。
2. 弥生時代前期末から中期初頭にかけて分布が拡がり、かつ成人甕棺を内部主体とするものが出現する。
3. 弥生時代中期まで支石墓は存在し、小共同体的グループを形成していたが、例外的に後期初頭まで下るものもある。

支石墓の多くは数基群在するのが通例であるが、特異なものとして須玖岡本D地点や佐賀県宇木汲田遺跡のような大石の存在も取上げている。

このように支石墓に対しては、漠然としたまとまりをもって把握する段階にまで達しているのではあるが、支石墓の概念が筆者により異なるために、トータルな理解がされていないことも事実であり、さらに論点となった個々の支石墓や出土遺物の取り扱いに於いても、説得性が充分ではないことがある。それは朝鮮支石墓の最終段階にあるとする碁盤型支石墓の系譜を引くものとしながら、朝鮮の碁盤型支石墓よりは2～300年も日本の支石墓の年代を早く想定する点に端的に示されている。ここではこれまで報告がなされた支石墓を集成分析し、改めて日本に於ける支石墓の在り方を見ていくことにする。日本の支石墓が朝鮮の碁盤型支石墓の系譜を引く点に於いては、ほぼ疑う余地がないとされているのではあるが、改めて朝鮮の支石墓の変遷をたどりながら検討することも必要であろう。

## 1. 朝鮮支石墓の変遷

朝鮮に二つの異なった型式の支石墓が存在することを最初に指摘したのは、支石墓研究の開

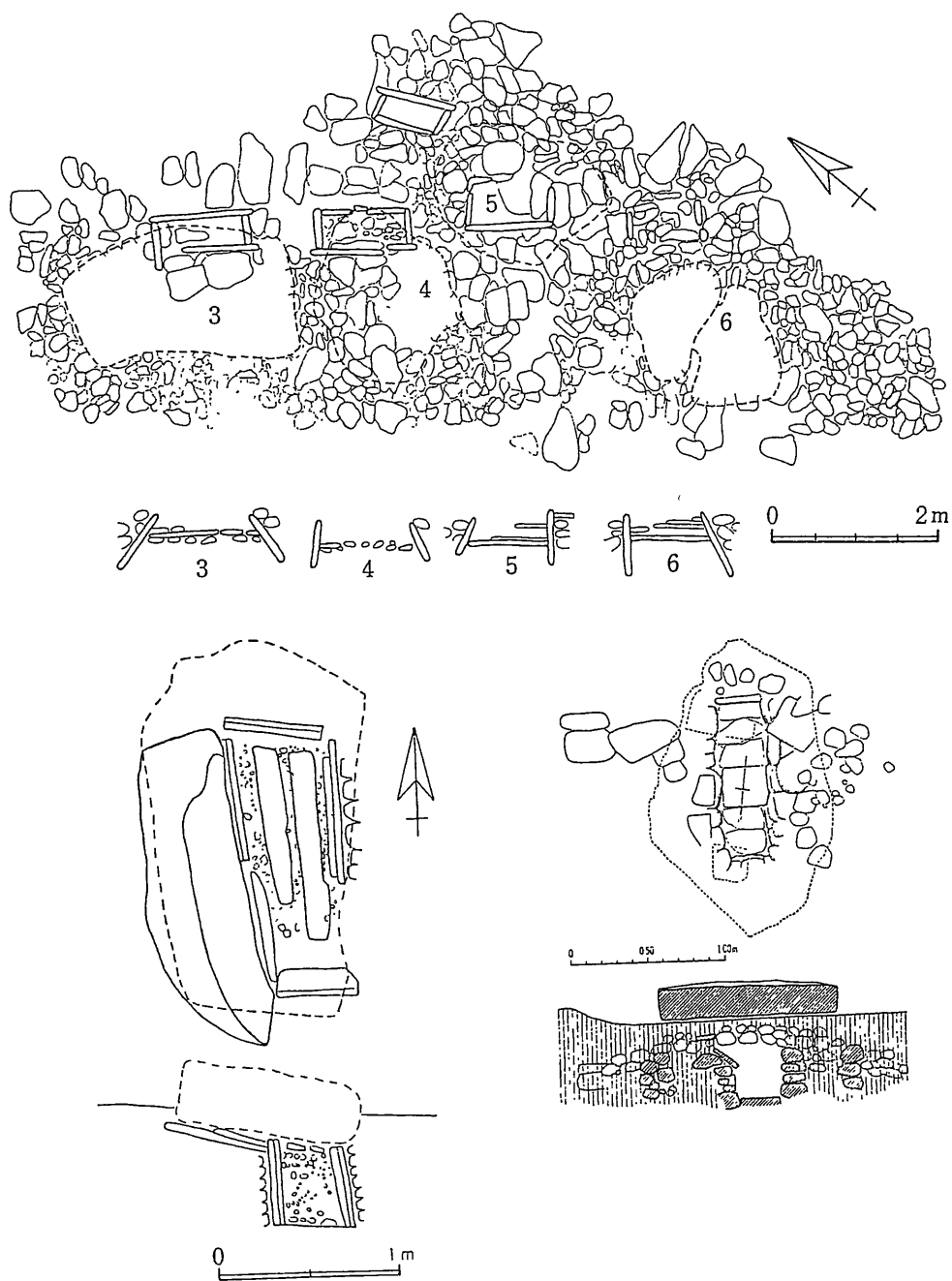
拓者である鳥居龍藏氏であった。氏は1911年（大正5）に朝鮮の遺跡踏査を行い、朝鮮には碁盤型と卓子型という二つの型式の支石墓が存在し、前者が古式の支石墓であることを想定したのである<sup>(9)</sup>。ところが昭和の10年代に入り、大邱大鳳町支石墓群の発掘調査を契機として、北方式（卓子型）支石墓が古く、南方式（碁盤型）が新しいという考え方がさほどの根拠もなく主張され始めてきた<sup>(10)</sup>。戦後三上次男氏は北方式と碁盤型支石墓以外のものをまとめて南方式支石墓とし、今日一般化している朝鮮支石墓の3分類化を行った<sup>(11)</sup>。この三上氏の分類案は様々に形を変えながらも朝鮮の研究者に受け継がれており、型式変遷の面でも北方式→南方式→碁盤型という展開過程は一般に受け入れられる所となった。ところが戦後の支石墓発掘調査では、南方式支石墓が平安南道の北端で発見され、また北方式に属する支石墓が南朝鮮でも分布が確認されることが判明した。このことからまず、「北方式」、「南方式」とする名称自体が事実と合わないことが知られたし、南方式と一括された支石墓にも変差が多くあって構造的には単純ではないことが分かってきた。従来の支石墓分類法はあくまでも形態論であり、副葬品の分析とか構造論から導き出されたものではなく、その欠点が事実をもって示されたのである。

支石墓を特徴付けるのは巨大な撐石であり、この撐石の重みを受ける技法の変化により型式化しその変遷を辿ると、伴出する副葬品の編年と良く符合し、支石墓の展開過程を明確に跡付けることができる<sup>(12)</sup>。それによると従来南方式支石墓と一括された中に、卓子型や碁盤型支石墓の祖形となる類型が存在し、卓子型支石墓にしろ、碁盤型支石墓にしろ、それらはいずれも支石墓展開の最終段階に属することが明らかとなった。その後卓子型支石墓の展開過程は北朝鮮の学者も主張するところとなった。

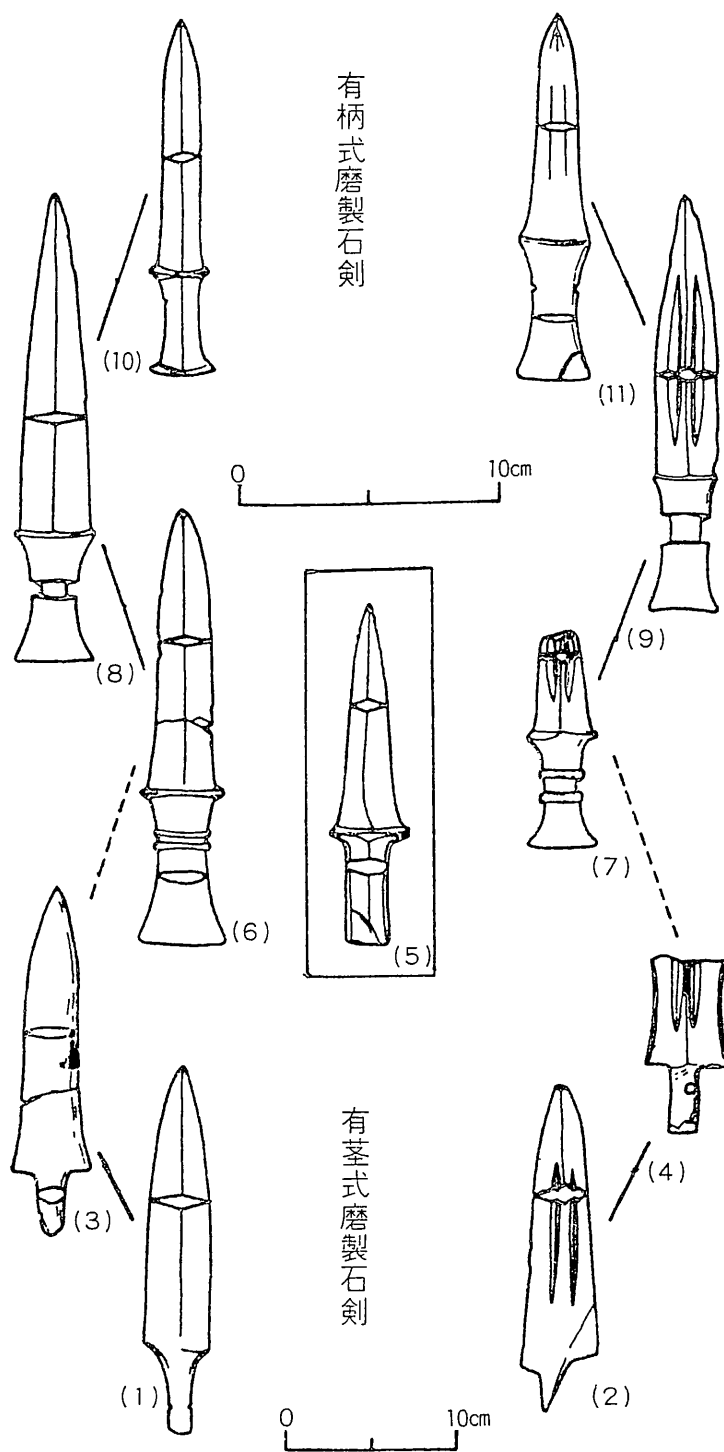
日本の支石墓を考察する上で関連することは、碁盤型支石墓の創出過程である。この系列の中でも最も古い型式のものは、黄海北道黄州郡沈村里天真洞、棘城洞、キン洞各支石墓群にみられるものと、忠清北道堤川郡黄石里第13号支石墓であり、沈村里A型と称した類型である。

この類型の支石墓は埋葬主体として箱式石棺を設けるが、撐石の重みを石棺4側の各上面で受けるために、その重量に耐えかねて側石が倒れるか、断面でみると揚底状をなすように沈下している。2番目の型式の支石墓は沈村里中学校運動場横の2号支石墓や平安南道龍淵郡石橋里支石墓、忠清北道堤川郡黄石里C号支石墓などでみられるもので、沈村里C型とした型式である。これは埋葬主体は箱式石棺であるが、箱式石棺の四周に板石を小口積にして石室を作り、石室の上面や石棺側石の上面で撐石の重量を支える類型であり、撐石の重みを支え方において沈村里A型よりも進歩した型式である。大鳳洞類型と称する3番目の型式の支石墓は、埋葬主体は石室や石棺、あるいは木棺であったりしても、埋葬主体の四周には切石を廻らし、かつ撐石と埋葬主体の間には「積石塚と合体した支石墓」と称されるごとく、多くの小石を配するものである。したがって撐石の重みは直接には埋葬主体に影響を及ぼさない。谷安里類型と称する支石墓は、埋葬主体は大鳳洞類型と変わりはないが、石棺や石室を覆う小石群よりも上位、当時の指標面に数個の支石を配し、この支石の上に巨大な撐石を載せるものである。この型式の支石墓は、従って撐石の重量はまったく埋葬主体には関係しない（以上第1図）。このように撐石を支える技法の面から支石墓をみると、

沈村里A型→沈村里C型→大鳳洞型→谷安里型



第1図 沈村里A型（上）、沈村里C型（下左）、大鳳洞型（下右）の支石墓



第2図 朝鮮磨製石剣の変遷図

と、撐石の重量が埋葬主体にかかるのを軽減していく方向へと展開して言ったことが窺えるのである。

支石墓の構造に於けるこうした展開過程は伴出する副葬品の編年によっても確かめられる。無紋土器の編年からは沈村里 A 型→沈村里 C 型→大鳳洞型との順序を辿ることができ、磨製石剣の編年の上では、沈村里 A 型→沈村里 C 型→大鳳洞型→谷安里型とも展開を裏付けている。

このように支石墓の構造的変遷は、伴出する副葬品の編年と矛盾するところが無いのである。

ところでこうした変化発展を辿る支石墓の年代はどのように考えられるであろうか。最古式の支石墓である沈村里 A 型には古式のコマ型土器、古式の柳葉型石鏃、無樋有茎式磨製石剣が伴う。このうち磨製石剣は関が反り返る型式に属し、中国西周時代の有茎式銅剣を模倣したものであることが知られているので、紀元前 5 世紀以前であると考えられよう。一方コマ型土器の年代は紀元前 7、6 世紀以降と比定されるところからは、ほぼその構築年代をおさえることが可能である。大鳳洞類型支石墓には無樋二段柄式石剣と無樋一段柄式石剣が伴出する。有柄式石剣は有光教一氏が説かれるように、細形銅剣を模倣したものであって、今日細形銅剣の朝鮮での出現は紀元前 4 世紀と想定されているので、その時期以降に比定しうる。ところで無樋二段式の有柄式石剣は有柄式石剣の中では最古式ではなく、有柄箍付石剣の型式変化したものであることから（第 2 図）、細形銅剣の出現期までその年代を遡上させることはできない<sup>(13)</sup>。早くても紀元前 3 世紀以降に考えざるをえないのである。谷安里型の支石墓から出現する磨製石剣は、最も形式化の進んだものであり、それ自体で年代を捉えることはできない。谷安里型支石墓から出土する丹塗磨研土器は、金海式灰陶以前の型式の土器と考えられる点から、遅くとも紀元前後以前と比定できる。

こうした年代観に沈村里 C 型から北朝鮮で発展した墨房里支石墓が紀元前 2 世紀前半以前と年代が想定できることなどを考慮すると、朝鮮での支石墓の変遷は次のようになる。

沈村里 A 型：紀元前 7～5 世紀

沈村里 C 型：紀元前 4～3 世紀

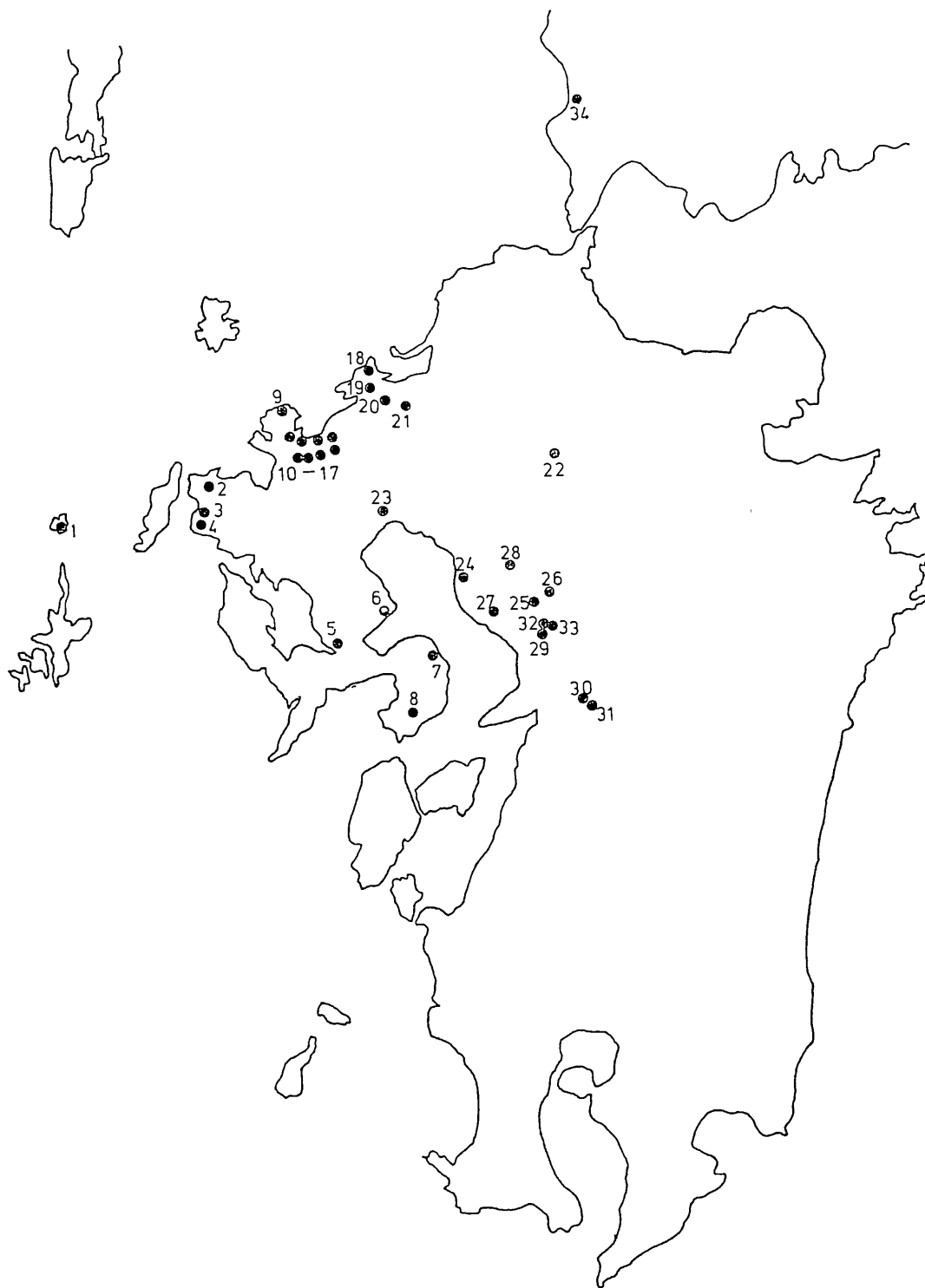
大鳳洞型：紀元前 2 世紀

谷安里型：紀元前 2～1 世紀

## 西北九州の支石墓

日本でみることのできる支石墓はいずれも支石をもつ支石墓であるといわれている。その点で朝鮮の谷安里型支石墓の流れのなかにあることが知られよう。さらに型式学的には単一であると考えられていることから、埋葬主体による細分が意味をもってくるようになる。埋葬主体による区分は、これまでに鏡山猛氏<sup>(14)</sup>や松尾禎作氏<sup>(15)</sup>により試みられてきた。そうした区別を参照しながら、これまで日本で知られた支石墓を類別したものが第 1 表である。

なおこの第 1 表にはこれまで「支石墓」と報じられてきたすべての支石墓を含んでいるとは限らない。前にも述べたように、日本の支石墓についての定義や概念が研究者の間で一致しておらず、調査者やそれをまとめた人によりないように変差があるために、一定の基準でまとめた。また支石墓の構造自体に移動させられたり、破損されやすい側面があるために、支石墓か否かの判断が頗る困難なものが多い。さらに支石墓と呼称されているものの調査例でも、その



第3図 支石墓分布図（遺跡番号は一覧表と一致）

第1表 西北九州の支石墓一覧表

	遺跡名	所在地	基数	埋葬主体	副葬品・年代	文献
1	松 原	長崎県佐世保市宇久町	2基	土壙	貝輪・貝製垂飾品・貝製白玉	(1)
2	里田原	〃 平戸市田平町	現存3基	箱式石棺		(2)
3	大野台	〃 〃 鹿町町深江免	8基	〃	夜臼式土器	(3)
4	狸 山	〃 〃 佐々町松瀬免	7基	〃	〃 ・翡翠製大珠	(4)
5	風観岳	〃 諫早市下大渡野町	20 + $\alpha$ 基	〃 ・土壙	〃 ・打製石斧	(5)
6	井 崎	〃 諫早市小長井町	1基	箱式石棺	板付式土器	(6)
7	景華園	〃 島原市三会町	1基	甕棺		(7)
8	原 山	〃 南島原市北有馬町	約100基	土壙・箱式石棺・甕棺	夜臼式土器・土偶魚形土製品	(8)
9	大 友	佐賀県唐津市呼子町	1基	土壙		(9)
10	徳須恵	〃 〃 北波多	10数基	甕棺		(10)
11	さこがしら	〃 〃 宇木東宇木	13基	土壙・箱式石棺		(11)
12	瀬戸口	〃 〃 〃	14基	土壙・箱式石棺・甕棺	夜臼・板付式土器	(12)
13	森 田	〃 〃 宇木井手口	16基	土壙	弥生前期土器	(13)
14	岸 高	〃 〃 半田	6基	不明		(14)
15	葉山尻	〃 〃 〃 葉山尻	5基	土壙・甕棺	板付式土器・石鏃	(15)
16	割 石	〃 〃 柏崎	6基	土壙	土器	(16)
17	五反田	〃 東松浦郡浜玉町	5基	土壙・甕棺	弥生前期土器	(17)
18	小 田	福岡県前原市	2基	甕棺・石室		(18)
19	志 登	〃 〃	10基	土壙	磨製石鏃	(19)
20	石ヶ崎	〃 〃	1基	石室	弥生中期土器・管玉	(20)
21	四 箇	〃 福岡市西区	1基	不明		(21)
22	朝 田	〃 うきは市浮羽町	1基	甕棺	弥生中期	(22)
23	羽山台	〃 大牟田市草木	1基	甕棺	弥生中期	(23)
24	南小路	佐賀県佐賀市大和町尼寺		不明		(24)
25	古閑山	熊本県菊池市旭志	5基			(25)
26	藤 尾	〃 〃 〃	9 + $\alpha$ 基	配石土壙	弥生中期	(26)
27	年ノ神	〃 玉名市岱明町	2基	〃		(27)
28	嘘の前	〃 玉名郡和水町	4基	不明		(28)
29	塔ノ木	〃 鹿本郡植木町轟		土壙		(29)
30	麻生原	〃 上益城郡甲佐町	2基	不明		(30)
31	八ツ割	〃 〃 〃	12基	〃		(31)
32	中 原	〃 合志市野々島	?	土壙		(32)
33	永 田	〃 〃 〃	?	〃		(33)
34	中ノ浜	山口県下関市豊浦町浜	1基	〃		(34)



報告書が公開されていない遺跡が多く、その構造を含めた実態を把握することに困難を来している。

以上のようなことからこの第1表に掲げた遺跡も、今後変わることが十分に予想されるのであり、集計はあくまでも昭和52年10月現在、私の知りえたものに限ってある。

従来支石墓と称されたものの中には、須玖岡本D地点の大石や志賀島の「金印」出土遺構も支石墓に含めて論議されることが多いが、日本の支石墓の性格として青銅器類や権力を象徴するような遺物を伴出することがない点、それらが考古学上の第1次資料ではないために、ここでは割愛した。同様に大石のみの存在で支石墓とされた事例もここには載せていない。

### 西北九州支石墓の構造

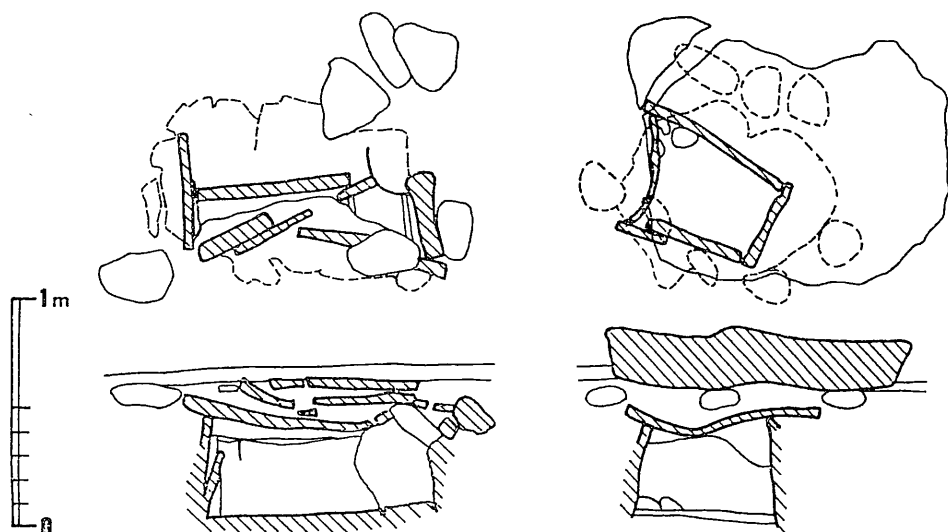
支石墓の埋葬主体について鏡山猛氏は、甕棺、石棺、石室、石囲、土壙の5形態があることを指摘し、松尾禎作氏もこれに賛同しつつ、その他に土壙や石囲の底部に敷石をもつタイプが存することを例示している。うち石囲については、「土壙内に5、6個の塊石を円とか楕円とか長方形などの形に並べ、中に屍体を置いたらしい構造施設を持つ」ものと定義されている<sup>(16)</sup>。ここでいう石囲類型の具体的な例として挙げられている志登支石墓の在り方をみると、石囲とする石が土壙と密接に関連するものではなく、支石と埋葬主体の間にあって埋葬主体を保護するものであり、南朝鮮支石墓の下部構造と類似した施設と考えることができる。従って本来的には埋葬主体は土壙であると推定される。縄紋晩期と弥生前期の支石墓を分析した森貞次郎氏は、同様の観点から支石墓の埋葬主体を次のように細分する<sup>(17)</sup>。

- (1) 長方形粗製箱式石棺墓
- (2) 方形に近い粗製箱式石棺墓
- (3) 楕円形石囲墓
- (4) 円形あるいは長楕円形土壙墓
- (5) 明確な支石をもたない石囲墓
- (6) 支石がなく石棺のあるもの

このうち(3)と(5)についてはいずれも長崎県原山遺跡の支石墓が挙げられているが、型式上では各々1例しか示されておらず、しかもその具体例は「6枚の側石で囲った」とか、「3側石でもって構成される「コ」字形の石囲」と表示されているところから、松尾氏のいわれる石囲墓とは異なり、むしろ志登支石墓のような形態に近く、その崩れた形とも推測できよう。ここで重要なのは、原山遺跡の支石のない支石と支石を有する支石墓の2つの型式の支石墓が存在する点であり、風観岳遺跡で二者が並存することが確認されている<sup>(18)</sup>ところから、別の観点からの分析が必要である。(6)の支石がなく石棺があるタイプとして例示されたのは小田支石墓や石ヶ崎支石墓であるが、前者については鏡山氏が聞き書きにより作図された資料が基になっていて、他の類似した遺構の例が無い時点では、むしろ石ヶ崎支石墓の在り方から石室墓として分類するのが適切であろう。

こうした先学の類別に倣い、今回は支石墓の埋葬主体を次のように分類することとする。

- (1) 箱式石棺墓
- (2) 土壙墓



第4図 狸山第5（右）、6号支石墓

- (3) 甕棺
- (4) 石室
- (5) 配石土墳墓

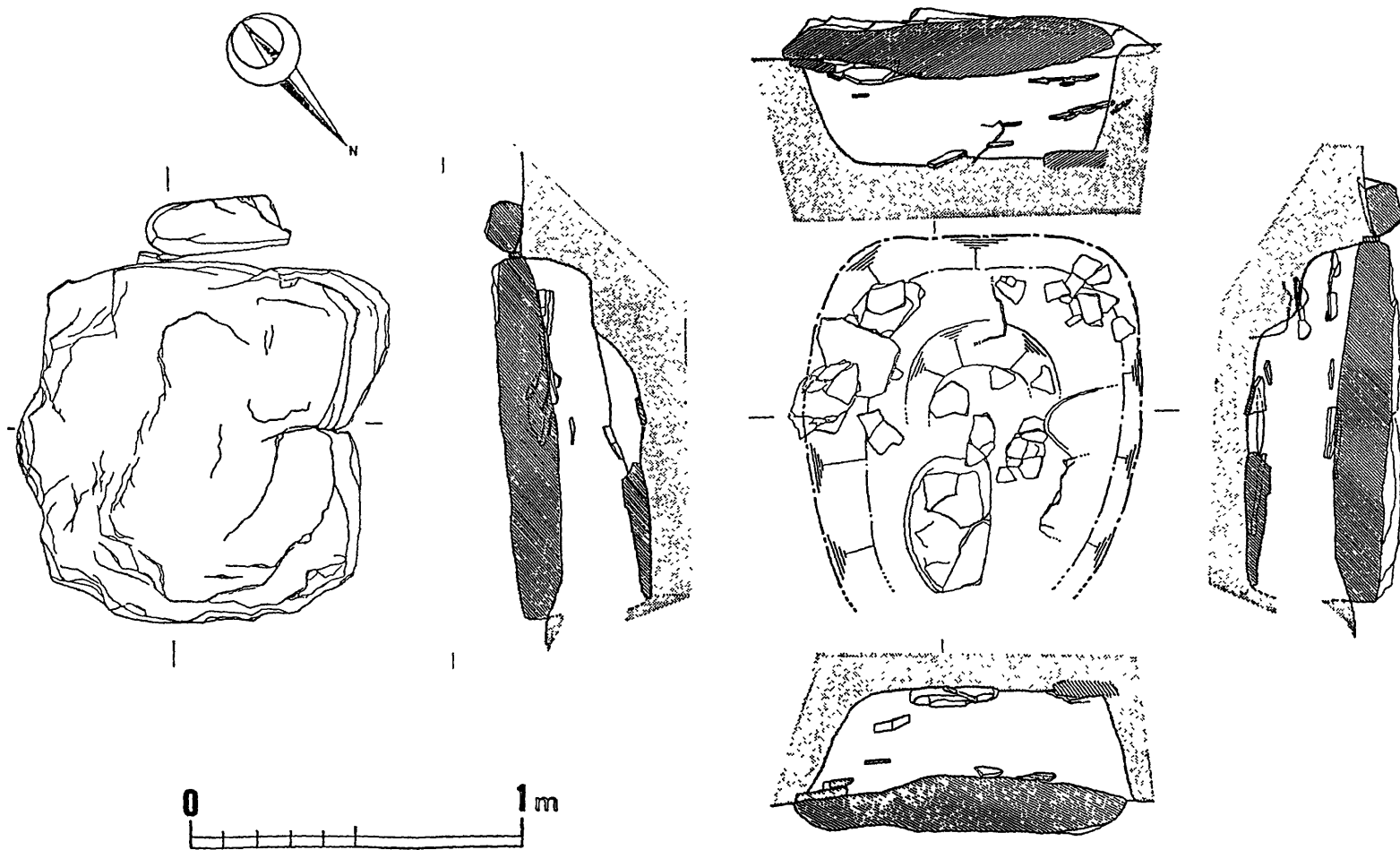
### 箱式石棺墓

数枚の板石を正方形もしくは長方形に組んで側壁とし、何枚かの板石で底部や蓋となしたものを棺とする類型。長崎県大野台遺跡<sup>(19)</sup>や狸山遺跡<sup>(20)</sup>にみられるもので、今狸山支石墓を例にとり説明を加える。

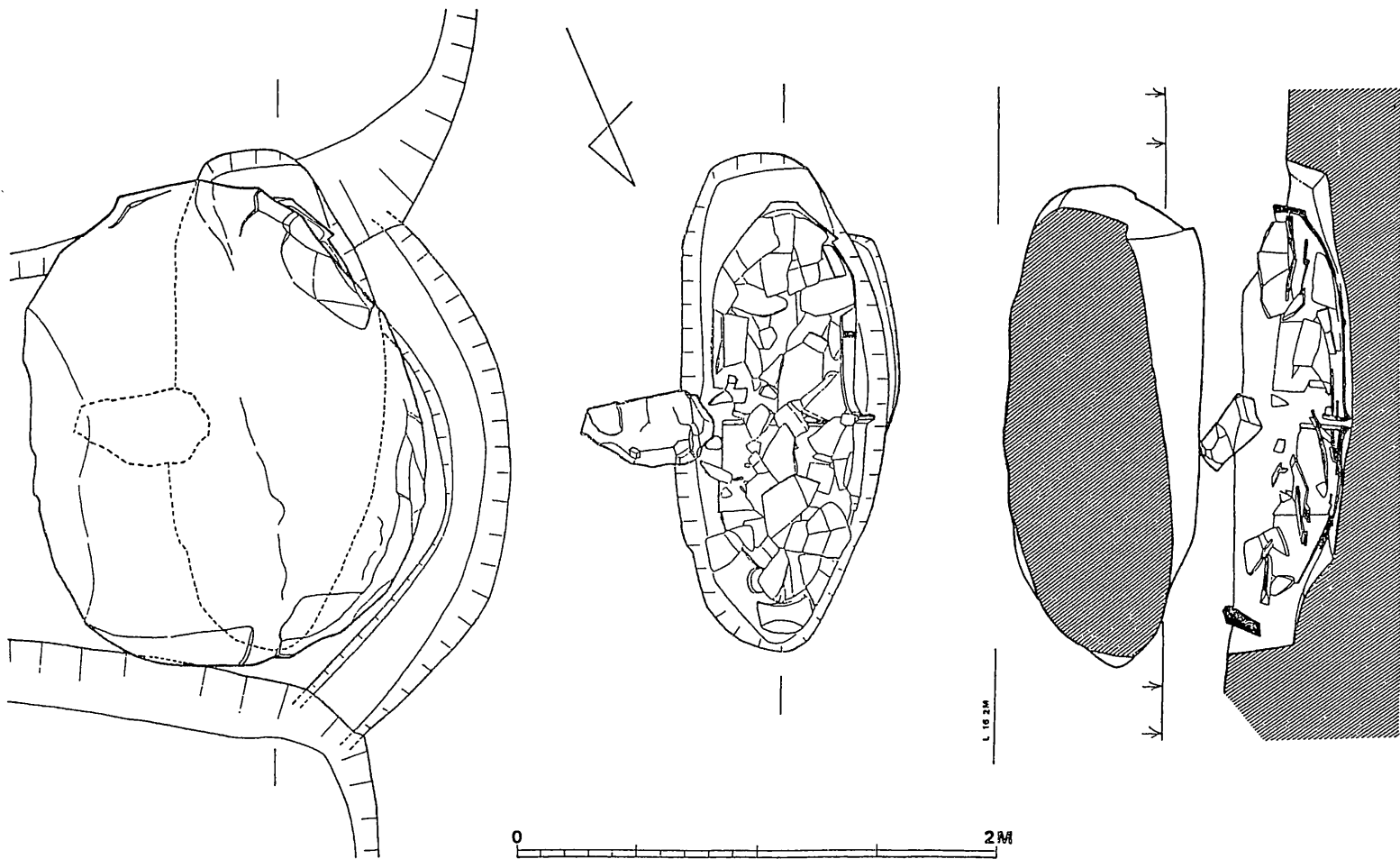
5号支石墓（第4図）の撐石は長さ1.3m、幅1m、厚さ0.2mの方形に近い偏平な花崗岩で、撐石の下には8個の支石がり、うち6個は撐石の内側深くにある。埋葬主体は平面が台形を呈する箱式石棺墓で、5枚の板石で構成され、蓋石として偏平な安山岩が1枚覆っている。石棺の内法は0.6m×0.4m×0.4mを測り、内部には遺物はなく黄褐色の土が充満していた。支石墓の支石に挟まれる状況で夜臼土器が検出されている。5号支石墓では石槨の蓋石と支石の間には特別な処置はみられないが、6号支石墓では偏平な板石を数枚重ねて置くことがあり、朝鮮の碁盤型支石墓との共通性をみせている。

大野台支石墓では撐石は既に失われているが、石棺の蓋石上に狸山支石墓と同様に板石や塊石が配されていて、支石墓の下部構造であったことが窺われる。この他に箱式石棺墓を内部主体とする支石墓は、長崎県里田原<sup>(21)</sup>、風観岳<sup>(22)</sup>、井崎遺跡<sup>(23)</sup>、原山遺跡<sup>(24)</sup>などの長崎県下の各支石墓でみることができ、佐賀県ではさこがしら<sup>(25)</sup>、瀬戸口各遺跡<sup>(26)</sup>の支石墓群中にある。

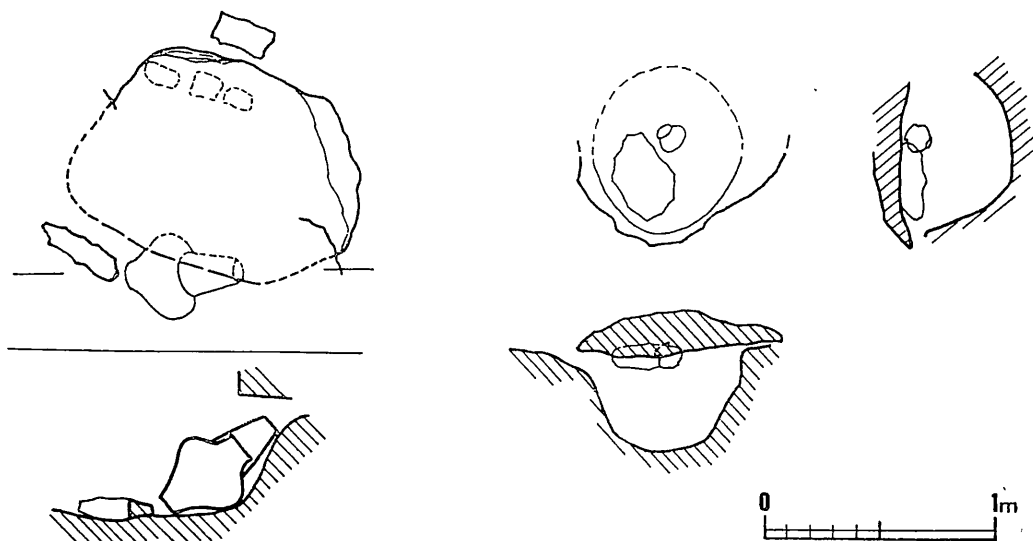
こうした主体部の石棺は弥生時代の箱式石棺墓に比べて著しく小型である点が特徴で、大野台遺跡の場合、最大の石棺で長さ0.96m、幅0.49m、最小のもので長さ0.49m、幅0.38mを測



第5図 風観岳支石墓



第6図 羽山台遺跡の支石墓



第7図 五反田支石墓

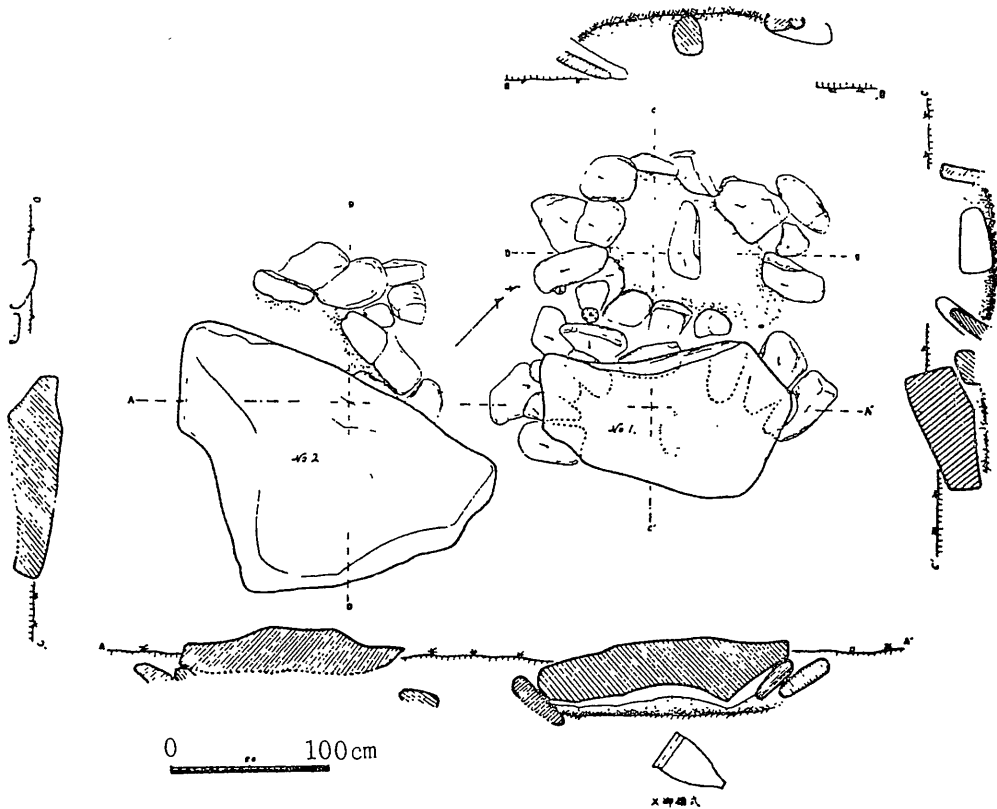
るにすぎない。こうした石棺の狭隘性はしばしば縄紋時代の屈葬と対比されて考えられている。

### 土墳墓

円形もしくは長楕円形の平面形を呈し、播鉢状の底部をなす素掘りの類型である。土墳の上部、あるいはその周辺に小板石を配置することも多い。風観岳3号支石墓はその標識的なものである。この支石墓は台形状をなす偏平な玄武岩を撐石とし、4個の塊石を支石とするもので、支石と埋葬主体部との間には3～4枚の偏平な粘板岩が置かれていた。土墳は南北に長軸をとる長さ1.4m、幅0.3～0.4m、深さ0.2～尾.3mの長方形を呈するものである。土墳の北壁半分は攪乱を受けていたが、その輪郭を把握することは可能であったという。副葬品としては何もなかった。風観岳8号支石墓（第5図）は、3号と同様なつくりであるが、土墳は大きくてかつ円形に近い。また土墳内に落ち込んだ板石の状態から木製の蓋の存在が推定されていて、この種の土墳は木棺もしくは木蓋が存在していたことが考えられるようになってきた。但し8号墓と3号墓では支石の有無で構造上二分されるために、支石の無い支石墓の土墳墓に木棺が伴う可能性もみられる。

### 甕棺

甕棺墓に見られるような合口甕棺や単棺を埋葬主体としたものであり、一部には甕と壺の組み合わせをしたものもある。羽山台C地点の支石墓（第8図）は、甕棺墓や土墳墓などが群在する墓地の中に1基だけみられるもので、長さ2m、幅0.7m、厚さ0.7mの大きな亀の甲型をした花崗岩の撐石をもち、支石は1個、土墳の一長辺に接するように配されている。土墳は長さ2m弱、幅0.87m、深さ0.48mを測る長方形大型のもので、土墳底は二段掘となっている。土墳内には合口甕棺が傾斜をもって埋葬され、甕の上半は壊れていたという。副葬品はなにも持たなかったが、甕棺の型式から中期初頭に位置づけられる。支石墓に伴う甕棺はこのような



第8図 藤尾支石墓

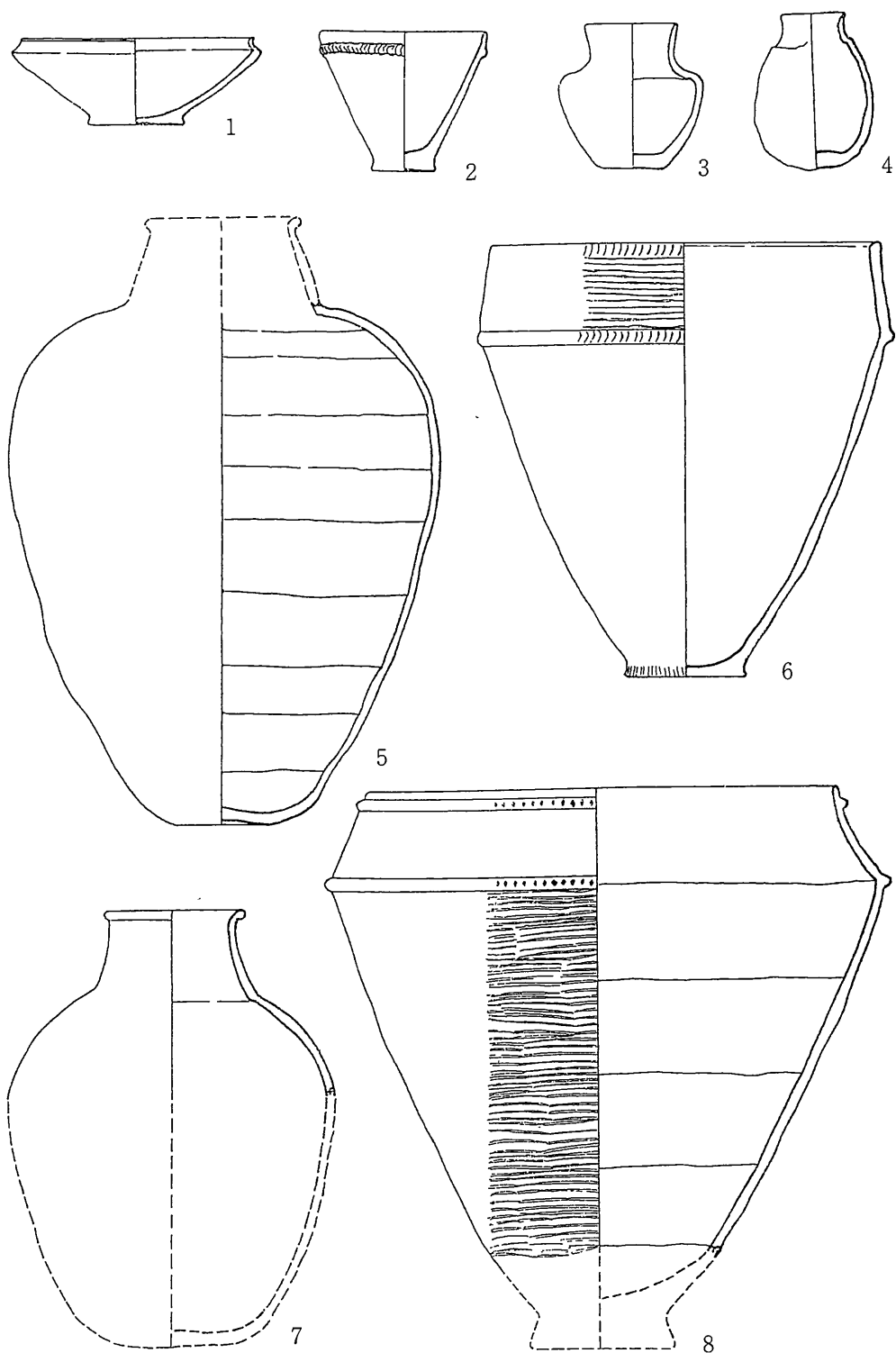
1基だけというのが通例であるが、葉山尻1号支石墓<sup>(28)</sup>のように、2個の直立倒置単棺、3個の合口甕棺、1個の水平設置単棺と6個の埋葬施設をもつような特異な事例もある。この他に五反田遺跡4号支石墓<sup>(29)</sup>のように、夜臼式の甕と板付Ⅰ式土器の影響を受けたと思われる壺の組み合わせを埋葬主体とするものもみられ(第7図)、その類例として原山遺跡D群1号支石墓<sup>(30)</sup>が挙げられる。

## 石室

石ヶ崎<sup>(31)</sup>と小田支石墓<sup>(32)</sup>の例があるに過ぎない。石ヶ崎支石墓は大きな撐石野下に、川原石などで粗雑な箱式石棺状に石室を拵えたものである。また小田支石墓の事例は、鏡山氏により推定復元がなされている。それによると7個の石を東西1.67m、南北1.2mの矩形に配して石室状のものを構築していたという。このように2例とも他にはみられぬ特異な構造であり、しかも両者ともに追跡調査であるため、本来の埋葬主体ははっきりとした形は不明である。

## 配石土壙墓

これは従来石囲墓などと称されていたものとは異なり、川原石や板石で動向に明確な縁取りをもつものであり、代表的な遺跡として藤尾支石墓群(第8図)を挙げることができる<sup>(33)</sup>。



第9図 原山支石墓出土土器（縮尺1／6）

その1号支石墓は大小15個の川原石で側壁を囲い、その平面形は1 m×0.7mの楕円形で、床面は舟底状に中窪みとなる土壌で構成された埋葬主体をなしている。藤尾支石墓群ではこうした構造のものが一般的であり、他に年の神支石墓もこれにあたるらしい。

### 西北九州支石墓の構造と変遷

支石墓の埋葬主体としては、上でみたように5類型が認められる。それらの時期と分布を見ていく前に、支石の無い支石墓の問題について考えて行こう。

支石の無い支石墓の存在は先にもみたように森貞次郎氏が原山遺跡D群1号を例示として指摘されたことであるが、そのご風観岳支石墓の調査において支石の無い支石墓が碁盤型支石墓に混じって数基存在することが分った。すなわちこの遺跡で明確に支石墓とされる20基のうち、支石の有無が判定できる10基中の6基は支石の無い支石墓型式である。しかも埋葬主体は箱式石棺と土壌の両者がみられ、その比率は5対1である。唐津平野から福岡県西北部にかけては観ることはできないが、里田原遺跡の埋葬主体が箱式石棺のものは支石をもたない。支石の無い支石墓の伴出品からみると、風観岳7号支石墓では夜臼式の壺、原山遺跡D群1号支石墓では壺と甕（第9図）がそれぞれ出土している。このうち風観岳遺跡のものは板付Ⅰ式土器と並行する時期の夜臼系土器と思われ、原山のそれも同様に考えられることで、支石の無い支石墓は弥生時代初頭頃の構築と推定される。

碁盤型支石墓のうち箱式石棺を内部主体とするもので副葬品を伴う遺跡では、大野台遺跡で夜臼式土器、狸山遺跡で夜臼式土器と大珠、風観岳遺跡と原山遺跡で夜臼式土器、井崎遺跡で板付Ⅱ式土器などがあり、弥生時代前期のはじめから前期中頃まで継続して築かれたことが分る。次に土壌墓を埋葬主体とする事例では、五反田3号支石墓で板付Ⅰ式壺、割石遺跡第2号支石墓で土器<sup>(34)</sup>、葉山尻遺跡5号支石墓で板付式壺、また同1号支石墓の側から板付式の壺、原山遺跡で夜臼式壺と土偶、魚形土製品などが伴出している<sup>(35)</sup>。これらからみると土壌を主体とする支石墓は弥生時代前期に比定できる。このことは葉山尻遺跡で弥生時代中期の甕棺墓により切断された土壌をもつ支石墓の存在や、森田遺跡で支石墓の周辺から弥生時代前期の土器が採集されていることと背反しない<sup>(36)</sup>。甕棺をもつ支石墓は弥生時代前期末から中期初頭の時期に限られるが、五反田遺跡4号支石墓や原山D群1号支石墓のような例をどのように扱うかが問題である。

原山遺跡の事例は夜臼式土器の小児棺と推定され、五反田遺跡では夜臼式の甕と板付式の影響を受けた壺がセットになり棺を形成している。これら二者はいずれも前期初頭に位置づけられるものであり<sup>(37)</sup>、甕棺墓のような大型甕を使用する支石墓とは一時期空白期間が認められる。また五反田遺跡や原山遺跡のものは壺棺であることはそれとは異なる。

一般に甕棺を埋葬主体とする事例は、支石墓の分布のはずれ（景華園遺跡<sup>(38)</sup>、朝田遺跡<sup>(39)</sup>、羽山台遺跡など）にあって、他の墓制と共同墓地を形成する傾向にあるか、あるいは支石墓構築時期の終わり頃の所産（葉山尻遺跡、徳須恵遺跡など）かであって、原山遺跡や五反田遺跡のものとは性格をことにするものであろう。配石土壌の例は、今の所藤尾遺跡と年の神遺跡で確認されているだけである。しかも両遺跡とも伴出品が無いために明確な構築時期の比定はできない。



藤尾支石墓の場合、従来は支石墓の周辺にある甕棺が「黒髪」式といわれてきた型式とは異なり、むしろ須玖式の甕棺と共通する点が多いことから、支石墓がその周辺の甕棺の型式時期とさほどかけ離れた時期ではないとすると、弥生時代中期の中頃の所産であると推定しうるであろう。

#### 注

- (1) W. Gowland, The Dolmens and Burial Mounds in Japan. Archaeologia. Vol. 55, 1897.
- (2) 鳥居龍藏「日本内地に純粹のドルメンありや」『人類学雑誌』第32巻第6号、1918年。
- (3) 島田貞彦・梅原末治『筑前須玖先史時代遺跡の研究』1927年。
- (4) 鏡山猛「原始箱式石棺の姿相」『史淵』27輯、1942年。
- (5) 文化財保護委員会『志登支石墓群』1956年。
- (6) 松尾禎作『北九州支石墓の研究』1957年。
- (7) 森貞次郎「弥生文化形成期の支石墓」『金載元博士回甲紀年論集』1969年。
- (8) 下條信行「韓から飛んできた石」『北部九州の古代文化』1976年。
- (9) 鳥居龍藏「平安道黃海道古蹟調査報告」『朝鮮総督府大正5年古蹟調査報告』1917年。
- (10) 榎本龜生「大邱に於けるドルメンの調査」『歴史公論』第60巻第8号、1937年。
- (11) 三上次男『満鮮原始墳墓の研究』1961年。
- (12) 甲元眞之「朝鮮支石墓の編年」『朝鮮学報』第66輯、1973年。
- (13) 甲元眞之「東北アジアの磨製石剣」『古代文化』第25巻第4号、1973年。
- (14) 注(5)に同じ。
- (15) 注(6)に同じ
- (16) 注(6)に同じ。
- (17) 注(7)に同じ。
- (18) 諫早市教育委員会『風観岳支石墓群調査報告書』1976年。
- (19) 大野台遺跡調査団「大野台遺跡」『古文化談叢』第1集、1974年。
- (20) 注(7)に同じ。
- (21) 長崎県教育委員会『里田原遺跡』1976年。
- (22) 注(18)に同じ。
- (23) 正林護『小長井町郷土誌』1976年。
- (24) 注(5)、(6)、(7)及び古田正隆『重要遺蹟の発見から崩壊までの記録』1974年。
- (25) 注(6)に同じ。
- (26) 注(6)に同じ。
- (27) 大牟田市教育委員会『羽山台遺跡』1975年。
- (28) 注(6)に同じ。
- (29) 注(6)に同じ。
- (30) 注(7)に同じ。
- (31) 原田大六「福岡県石ヶ崎の支石墓を含む原始墳墓」『考古学雑誌』第38巻第4号、1954年。
- (32) 坂本経堯『藤尾支石墓群』1959年。
- (33) 注(6)及び田添夏喜『年の神遺跡調査報告』1969年。

- (34) 注（6）に同じ。
- (35) 注（7）に同じ。
- (36) 注（7）に同じ。
- (37) 森貞次郎「北九州の古代文化」『日本古代史の旅』1975年。
- (38) 注（6）に同じ。
- (39) 注（5）に同じ。
- (40) 注（7）に同じ。
- (41) 金載元・尹武炳『韓国支石墓研究』1967年。
- (42) 有光教一『朝鮮磨製石剣の研究』1959年。

『熊本大学法文論叢』第41号、1978年